



Title	堀内正和の構成彫刻一戦時期および占領期を通じた造形理念の展開一
Author(s)	菊川, 亜騎
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105363
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 （ 菊 川 亜 騎 ）	
論文題名	堀内正和の構成彫刻——戦時期および占領期を通じた造形理念の展開——
論文内容の要旨	
本稿は、堀内正和が1930年代の塑造家としての活動を出発点とし、アジア太平洋戦争、敗戦、そして占領期という激変の時代を経て、1950年代半ばに独自の構成彫刻へと到達する過程を明らかにするものである。堀内における抽象理念は、単に西洋モダニズムを追従したものではなく、敗戦に伴う国家的アイデンティティの崩壊、占領政策下での制度変容、そして個人としての思索の深化が交差するなかで、自律的に形成されていった。本稿は、その約30年にわたる思想・制作の変遷を四章構成で跡づけ、堀内の造形思想がいかにして構成彫刻に至り、またその歴史的意義がいかなるものであるかを検討した。 第1章では、堀内が1930年代に塑造家として「日本の彫刻とは何か」という問いに対峙し、多様な表現方法を模索した過程を考察した。戦時下にもシュルレアリスムや古典美術を参照しつつ思想的探求を継続し、彫刻家として独自の立場を築こうとしていた。また帝展改組により制度的支柱を失った経験は、美術界の教育・展覧会制度・批評に対する深い不信を生み、反アカデミズム的姿勢の核となった。 1940年から終戦に至るまで、堀内は展覧会への出品を中止し、アテネ・フランセに通って西欧言語や哲学の学習に情熱を注いだ。先行研究ではこの時期が作家活動の空白期として扱われてきたが、第2章では、友人である彫刻家・辻啓堂と進めたの彫刻研究を補助線に当時の活動を再構成した。その結果、この時期は単なる制作停滞や戦争美術への忌避ではなく、むしろ思想的・制度的変革に対する批評的態度の表出であり、新たな彫刻家団体の構想、さらにはフランスの美術史・教育制度・アジア植民地政策の学習を通して、日本美術の制度的基盤を根底から再考する契機であったことが明らかになった。 とりわけ重要なのは、敗戦と占領によって国家的基盤を失った日本社会のなかで、堀内自身もまた「根をもたない存在」として生きる決意を固めた点である。このアイデンティティ喪失の経験は、同時に、抽象美術が日本の風土や文化的伝統といかに接続し得るのか、すなわち抽象がどこに「根を下ろしうるのか」を彼自身に問い直す契機となった。国家的・文化的基盤の喪失と、抽象表現の根拠地を探る営為は密接に連動しており、堀内はその双方を思想的課題として引き受けるなかで、抽象を「心の動き」として捉え、無形の観念を形象へと結晶させる表現理念へ到達したのである。 第3章では、1950年の京都市立芸術大学彫刻科への着任を契機に京都へ転居した堀内が、占領下の京都において堀内がどのようにモダンアートを再受容していったかを検討した。特に、GHQの下で一般に開放されたCIE（Civil Information and Education Section）図書館を積極的に利用し、西欧モダニズムの文献を貪欲に吸収したことは重要である。国家的価値体系が失われ、文化的指標が不確かな状況において、堀内はモダンアートを新たな思考と表現の支えとして選択した。こうした制度的環境の変化は、占領政策による教育改革——美術史教育の導入、学科制の整備、個人の思考と自律性の重視——と密接に関連し、辻との再出発を教師として迎えたことも、抽象を「思考の形式」として理解する枠組みを広げることに寄与したといえるだろう。 また《Cubi》《線A》〈exercise〉など1950年代の重要な構成彫刻の作品分析を軸に、形を面へと解体し再構成する方法を検討した。堀内はこれを通じてコンクリート・アート（Concret Art）やポスト構成主義理念を批評的に吸収し、自身の構成彫刻の手法を制度化していった。加えて注目したのは、関西を基盤とした作家たちと美術雑誌を積極的に利用して国際的抽象コミュニティを形成したことである。彼が『アール・ドージュルディ』（Art d'aujourd'hui, L'Architecture d'aujourd'hui, Paris）の文献や図版、そして前衛書の雑誌『墨美』（墨人社）への寄稿を介して、東西の美的感性や空間概念を双方向的に学び、構成彫刻の構想を築いていったことを明らかにした。 一方、堀内の構成彫刻の評価の変遷を振り返ると、国内と国外とはその理解に大きな隔たりがあった。第4章では、〈exercise〉が発表された「日本の彫刻 上代と現代—埴輪・金銅仏・伎楽面」展（1956年9月1日-30日、東京国立近代美術館）と、第4回サンパウロ・ビエンナーレ（1957年9月22日—12月30日）における選抜と批評を取り上げ、当時	

世界的に政治状況と連動して展開していた表現主義的な「熱い抽象」と幾何学的な「冷たい抽象」の対立、そして日本における「アンフォルメル旋風」との関係を踏まえて検討した。〈exercise〉シリーズはサンパウロ・ビエンナーレにおいて、ブラジルで台頭していたネオ・コンクリート・アートやジョルジュ・オティサの幾何学抽象彫刻と強く共鳴し、形態探求や思考過程そのものを重視する美学によって評価され、同時代的な実験精神を具現化する先鋭的な実践として受け止められた。一方、日本国内では、制作プロセスの理念性よりも造形的形式や技術に注目が集まり、この国際的文脈は十分に共有されなかった。

こうした理解のギャップの背景には、当時の国内批評界がアンフォルメルを中心とした表現主義的価値観に大きく傾斜し、抽象美術の評価基準が定まらなかったことがある。「上代と現代」展では、埴輪と抽象彫刻を空間構成の観点から接続し、日本彫刻史の再編を試みたが、批評家からは両者の断絶が指摘され、抽象を歴史的な文脈に位置づける試みは十分な支持を得られなかった。他方、堀内自身は埴輪に素材との対話性や即興性を見だし、芸術は「物」ではなく意識の「作用」とであると捉える理念を深化させ、その思考が〈exercise〉につながる制作態度を導いていったと考えられる。

また堀内の評価の確立は、1950年代に開館した近代美術館が近現代彫刻史を編成していく過程と密接に関わっている。アンフォルメルの熱気が収束し、国際的同時代性という視点が国内でも共有され始めると、堀内は近代彫刻史再編の要として位置づけられるようになっていく。こうして構成彫刻はその時々での批評的文脈のなかで繰り返し読み替えられながら、最終的に「幾何学抽象彫刻の先駆者」としての評価の基盤を形成していったのである。

以上を総合的にみると、堀内の抽象理念形成は、敗戦による国家的アイデンティティの喪失、占領と教育改革による制度環境の変化、そして個人としての思想的探求が多層的に絡み合って成立していたことが明らかとなる。戦後モダニズムがアメリカ中心の一方向的な伝播によって形成されたとする従来の枠組みでは捉えきれず、周縁地域におけるモダニズムは、ローカルな制度・教育・社会条件と作家主体の実践が交錯するなかで多元的に生成していた。本稿で扱った堀内の例は、まさにその具体例である。ブラジルにおけるコンクリート・アートが教育制度と結びつき固有の展開を見せたように、日本でも占領期改革のなかで幾何学抽象が教育制度と深く関連しながら普及し、独自の受容が生まれた。堀内は、制作者としてだけでなく教育者・翻訳者・批評家としても積極的に関与し、抽象理念を実践と教育と批評の場で不断に再編していった。彼にとって抽象は、精神的営為としての思索を彫刻へと結晶させる手段であり、「日本の彫刻とは何か」という問いに対する生涯にわたる応答でもあったのではないだろうか。

本研究を通じて明らかになったのは、堀内正和における抽象の概念が、単なる形式や西洋潮流の受容としてではなく、戦前の塑造活動、戦時下の思想的探求、占領期の制度的・教育的条件との交錯を経て、作家自身の思索と造形の現場で着実に発見され、具体化されていったということだ。抽象や構成は外部から与えられた理念ではなく、彼自身の根源的な問いを媒介に、彫刻を通して思索を反復し、精緻化するなかで自律的に再編された概念であった。そして、模型としての彫刻や教育活動、翻訳、批評などへの能動的関与を通じて、周縁地域におけるモダニズム受容の具体例として力強く示されたのである。このことは、堀内個人の活動を超越し、戦後日本美術をグローバル・アートヒストリーの文脈で再定位する試みとしても重要であろう。堀内の彫刻思想と制作は、日本の戦後抽象美術を国際的文脈の中で批判的かつ多面的に読み直すための、重要な視座を提供しているのではないだろうか。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (菊 川 亜 騎)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 池上裕子
	副 査 大阪大学 教授 岡田裕成
	副 査 大阪大学 名誉教授 圀府寺司
	副 査 鳥取県立美術館館長 尾崎信一郎
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 堀内正和の構成彫刻―戦時期および占領期を通じた造形理念の展開―

学位申請者 菊 川 亜 騎

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	池上裕子
副査	大阪大学教授	岡田裕成
副査	大阪大学名誉教授	園府寺司
副査	鳥取県立美術館館長	尾崎信一郎

【論文内容の要旨】

本研究は、日本における幾何学的抽象彫刻の先駆者として知られる堀内正和（1911–2001）の彫刻について、アジア太平洋戦争、敗戦、占領期という歴史的断絶を経て、彼の「抽象」理念がいかに形成され、構成彫刻へと結実したのかを、一次資料から実証的に論じることを目的とするものである。堀内は1954年以降、点・線・面といった造形要素を組み立てる演繹的システムによる鉄の構成彫刻を展開し、発注制作による独自の制作を行った。その作品は国内の主要美術館に収蔵され、日本を代表する彫刻家の一人として評価されている。しかしながら、戦時中は制作をしていなかったこともあり、国内外の芸術動向や彼の翻訳・批評言説までも考察対象とした研究が存在しなかった。本論文は彼の経歴全体を包括的に論じる初の研究として、日本の近代彫刻史研究における欠落を埋める試みである。

本論文は第1章で、1930年代に塑造家として出発した堀内が、モダニズム的表現を模索する過程で古典古代美術を参照しつつ、彫刻表現の可能性を探究していた点を整理した。また、帝展改組によって制度的基盤を失った堀内が美術制度や教育への懐疑を強め、1940年以降、展覧会出品を中止した経緯を確認した。第2章はこの時期に堀内が行ったアテネ・フランセでの語学研究、翻訳活動、辻晉堂との交流から、彼が日本の彫刻と美術教育を批判的に再考する思索を深化させていたことを示した。また敗戦による国家的アイデンティティの喪失が、造形理念の転換点となり、抽象を形式操作ではなく「意識の作用」として捉える思考を育んだことを検証した。

第3章は、1950年に京都市立芸術大学へ着任した堀内が、CIE図書館や西欧美術雑誌を通じてモダニズムを再受容する過程を検討した。《Cubi》（1950）は、キュビズムを手がかりに、面構成の構想を得た転機となる。構成彫刻の代表作《線A》（1954）や《exercise》（1956）は、量塊的表現を排し、空間のリズムや構造を探究するもので、本章はこの制作背景に着目した。スケッチブックや彼の評論から、美術雑誌を通じてコンクリート・アートやポスト構成主義を体系的に理解していたことを確認し、紙という素材を起点に、形が二次元から三次元へと展開する過程自体を彫刻化することで、彼の抽象が思考を可視化する方法であったことを論じた。また、堀内が現代美術懇談会や『墨美』『アール・ドージュルディ』を通じて国際的抽象美術のネットワークに参加したことから、彼の思想を東洋美術の余白概念と西洋近代彫刻の空間理論を重ね合わせた考察として位置づけた。

堀内の構成彫刻は、当初から建築化や工業制作を想定した「模型」として構想され、民主教育を推進する大学の造形教程とも密接に結びついてきた。だが、こうした彫刻のあり方は、日本の美術批評家にはすぐには理解されず、逆に海外では好意的に評価されていた。第4章ではこの点に着目して、堀内の彫刻が第4回サンパウロ・ビエンナーレ（1957）でブラジルのネオ・コンクリート・アートと共鳴し、その国際的同時代性が評価されていたことを確認した。このことから、アンフォルメル受容の後、幾何学的な抽象表現を省みなくなっていく国内の美術批評の展開自体を批判的に読み直していく必要があることを指摘した。

以上の議論から、本論文は、堀内の抽象理念が単なる西洋モダニズムの受容ではなく、敗戦と占領期の京都という歴史的条件、制度変容、そして個人の思想的探求が交錯するなかで自律的に形成されたものであることを結論づけ、この実践が、中心としての西欧に対する周縁地域におけるモダニズム生成の多元性を示す事例として位置づけることができると主張した。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の最大の功績は、これまで日本を代表する抽象彫刻家として評価されてきたにもかかわらず、包括的な研究が立ち後れていた堀内正和について、一次資料を可能な限り渉猟して、戦前、戦中、戦後という貫戦的な視点からその造形理念の成立と展開を明らかにしたことである。神奈川県立近代美術館が所蔵する堀内に関する資料や書簡を読み込み、初期の堀内の造形的関心や、病と戦争による制作の中断、フランス語を得意とした堀内による仏語文献の翻訳など、これまで詳細に論じられていなかった点に光を当てた。中でも、占領期の京都ではGHQによる直接的な統制や美術教育の改革への介入があり、堀内がそうした文脈の中で彫刻家として再出発したこと、また海外の美術雑誌の記事を翻訳して紹介するなど、日本における西洋モダニズムの受容に関しても主要な役割を果たしていたことを明らかにしつつ、彼の抽象彫刻の理念を解明した点は特筆に値する成果である。

さらに本論文は、堀内の制作が単なる西洋の抽象彫刻の焼き直しではなく、思考のプロセス自体を可視化しようとした点に独自性があること説得的に論じ、そうした制作の核心には「日本の彫刻とは何か」という命題があったことを指摘した。それは近代の作家が必然的に抱く問いであり、唯一の回答が存在するわけではないが、本論文では堀内がどのようにそれに向き合ったのかを、研究史が浅い抽象彫刻史における一つのケーススタディとして議論した。また、ブラジルにおけるコンクリート・アートの潮流と堀内作品との意図せざる共鳴についても、国際的な文脈における日本の抽象彫刻の読み直しの可能性を説得的に論じた。こうした読み直しの際に重要になるのが堀内による評論活動である。彼は戦時中は制作を中断していたため、戦争協力を行わなかったことを戦後はアピールしつつ、60年代以降はコンセプチュアル・アートとも意図的に共鳴しながら、自覚的に自らのキャリアを構築し直した。こうした堀内による戦略的な言説活動も分析した本論文は、高く評価できる。

とはいえ、本論文に改善の余地が全くないわけではない。まず、コンテキストの紹介と分析に注力するあまり、肝心の作品分析に十分な紙幅が割かれていない傾向がある。また、堀内の貫戦的なキャリアの中で、戦中に彼が内面化したコロニアリズム的な視点が戦後にどう接続したのか、必ずしも明らかにされていない。さらに、堀内が戦後に抽象に移行した理由について、より詳細な分析をすることができれば、全体としてさらに説得力のある論考になったことと思われる。

しかしながら、以上のような課題はあるものの、質疑応答を通して、学位申請者もそれらについて認識し、単著としての刊行に向けた具体的な修正について、すでに考え始めていることが分かった。また、これらの問題は、堀内について多くの資料を初めて議論の俎上に上げ、数多くの新知見を示した本論文の学術的な価値を損なうものではない。よって本論文を博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと認定する。